

埼玉の獅子舞 『剣掛かり』について

石川博行

はじめに

埼玉県内では、獅子舞は、伝承を含めると、約300か所で行われていたという。簡単に獅子舞といつても、形式的には一人立三頭獅子と二人立一頭獅子に分けられるが、芸態として見ると比較に困るほど存在している。一人立三頭獅子形式は、埼玉県内には満遍無く分布し、現在も多く見ることができる。しかし、満遍無く分布している獅子舞も、演目によっては、地域的な偏りを持つものや、持たないものと色々である。⁽¹⁾数多くある獅子舞の演目の中から、剣・太刀に焦点を当てて獅子舞を見ると、表1および図1のとおりの分布がみられる。これらは、すべてが現在行われることではなく、中には消滅しそうな舞も多くある。表中の記号◎については、実見したり、聞き取りできた獅子舞である。ここで述べるのは、これらを中心に、一人立三頭獅子形式の獅子舞の演目のひとつである、『剣掛かり』の分布や意味を明らかにしようとするものである。

『剣掛かり』の検討方法について

事例を提示するため、次の二つの方法で演目を分類する。

1 名称からの分類

剣・太刀を取り扱った獅子舞の演目の名称は、表1のとおり剣掛かり・白刃掛かり・宿割り・四句割り・白刃（シラハ）・太刀掛かり・剣の舞・追太刀舞・さんぎり・天狗の舞・辻ぎり・太刀の舞・刀掛かりなどがある。剣も太刀も刀も「・・掛かり」「・・舞」と言葉を入れ替えると、それぞれ文字面はよく似ているので、剣に統一して「剣掛かり」「剣の舞」とする。また、宿割りも四句割りも音が同じように聞こえるので、「宿割り」とする。名称だけでは分類できない、追太刀舞・さんぎり・天狗の舞・辻ぎりがある。これらは、「その他」とする。

これらの舞の実態は、剣あるいは太刀を取り扱っていることは確かである、したがって、舞の事例を提示して検討する中で再度分類を行う。しかし、これらの名称は、便宜上『剣掛かり』と総称し、

- (1) 「剣掛かり」 (2) 「白刃」 (3) 「剣の舞」 (4) 「宿割り」 (5) 「その他」
- と分類する。

2 剣と獅子の距離からの分類

『剣掛かり』は、舞の実態として「剣と獅子」には距離がある。このことから次のとおり

表1 『剣掛かり』の所在地一覧

	所 在 地	主 な 神 社	主な祭日	演 目 名
1	秩父郡大滝村浜平	觀音堂	◎ 旧暦 2 / 22	剣掛かり
2	秩父郡大滝村三峰	三峰神社	8 / 26	剣掛かり
3	秩父郡荒川村下郷	熊野神社	◎ 10 / 9	剣掛かり
4	秩父郡小鹿野町長留	宗吾神社	◎ 10 / 8	太刀掛かり
5	秩父郡吉田町久長	諏訪神社	◎ 4 / 3	剣掛かり
6	秩父郡吉田町阿熊	熊野神社	◎ 10 / 1	太刀掛かり
7	秩父市浦山	大日堂	◎ 10 / 15	剣掛かり
8	秩父市影森	八坂神社	4 / 3	剣掛かり
9	秩父市久那	葛城神社	4 / 8	剣掛かり
10	秩父市矢行地	諏訪神社	10 / 27	白刃・太刀掛かり
11	秩父市黒谷	八幡神社	◎ 4 / 13	宿割り
12	秩父郡皆野町下三沢	諏訪神社	◎ 10 / 7	四句割り
13	秩父郡皆野町皆野	諏訪神社	◎ 10 / 7	宿割り
14	秩父郡皆野町金崎・国神	金崎・国神神社	◎ 10 / 5	剣掛かり
15	秩父郡皆野町重木	諏訪神社	10 / 10	剣掛かり
16	秩父郡皆野町奈良尾	秋葉神社	◎ 10 / 10	剣掛かり
17	秩父郡皆野町門平	諏訪神社	◎ 10 / 10	剣掛かり
18	秩父郡皆野町大神	諏訪神社	10 / 14	剣掛かり
19	秩父郡横瀬町芦ヶ久保	白髭神社	◎ 8 / 16	白刃
20	秩父郡両神村煤川	宇賀神社	4 / 15	太刀掛かり
21	秩父郡東秩父村朝日根	八幡神社	◎ 11 / 3	白刃
22	秩父郡東秩父村萩平	八幡山神社	◎ 11 / 3	白刃
23	秩父郡長瀬町唐沢	武野神社	10 / 1	剣掛かり
24	児玉郡神川町池田	守神神社	◎ 10 / 15	剣の舞
25	児玉郡神川町渡瀬	木宮神社	◎ 4 / 15	剣の舞
26	入間郡名栗村下名栗	諏訪神社	◎ 8 / 25	白刃
27	入間郡越生町小杉	梅園神社	◎ 10 / 24	白刃
28	飯能市北川	喜多川神社	◎ 8 / 17	白刃
29	飯能市高山	三輪神社	8 / 20	白刃
30	飯能市花桐	諏訪神社	◎ 8 / 17	白刃
31	比企郡都幾川村大野	大野神社	◎ 8 / 18	白刃
32	羽生市中手子林	八幡神社	旧暦 8 / 15	追太刀舞
33	幸手市千塚	浅間社	◎ 7 / 15	太刀・辻
34	春日部市赤沼	赤沼神社	7 / 15	さんぎり・三番叟
35	春日部市銚子口	香取神社	◎ 1 / 15	天狗の舞
36	北葛飾郡庄和町西金野井	香取神社	◎ 7 / 19	辻ぎり
37	越谷市下間久里	香取神社	7 / 15	太刀の舞・辻ぎり
38	八潮市大瀬	氷川神社	◎ 7 / 1	太刀掛かり
39	八潮市二丁目	氷川神社	7 / 15	太刀掛かり
40	三郷市戸ヶ崎	香取神社	◎ 7 / 1	刀掛かり
41	戸田市下戸田	氷川神社	◎ 7 / 15	太刀の舞・ヅカブリ

埼玉県教育委員会(1970) :『埼玉の獅子舞』 埼玉県教育委員会(1972~1980) :『埼玉県市町村誌』(全21巻) を基に作成。

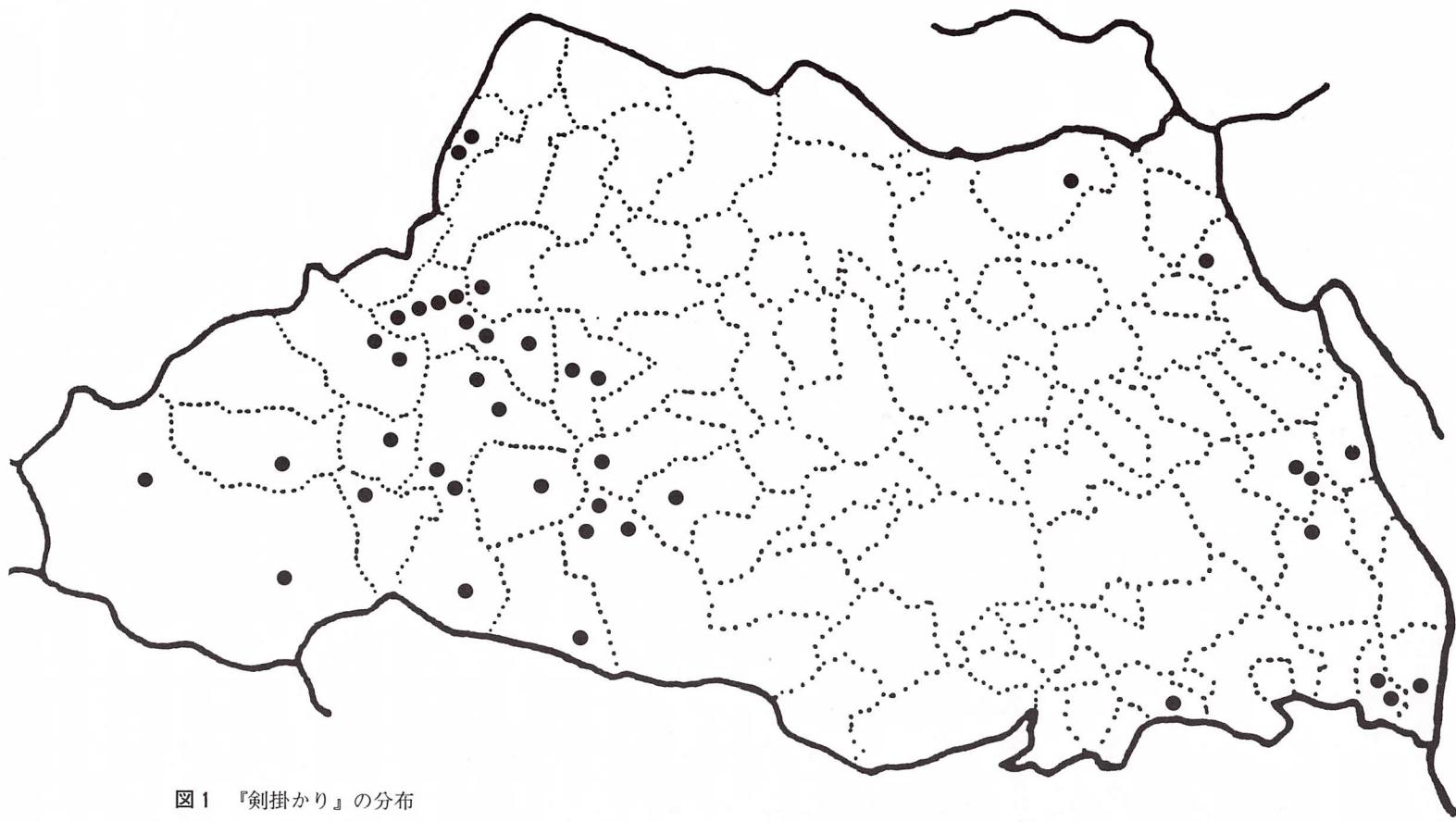


図1 『剣掛かり』の分布

- (1) 獅子が剣にまったく触れず、第三者が剣を手に持つ。
- (2) 獅子を被る人が、剣を手に持つ。
- (3) 獅子頭の口が、剣を加える。
- (4) 獅子を被る人の口が、剣を加える。

と芸態の発展動機をこのように位置付けて分類する。

この2つの分類に基づいて、事例を提示する。

事 例 の 提 示

1 「剣掛かり」

「剣掛かり」は、剣掛かり、白刃掛かり、太刀掛かり、刀掛かりを含んでいる。それぞれには、次の比較である距離を見ると、さらに

- (1) 1 —— (1) 浜平 下郷 長留 久長
- (2) 1 —— (2) 大瀬 二丁目 戸ヶ崎
- (3) 1 —— (3) 金崎・国神 重木 奈良尾 門平 阿熊
- (4) 1 —— (4) 浦山

と分けることができる。

(1) のグループについて

浜平の獅子舞は、村回りと観音堂の庭で舞われる。村回りはカミマイリといい、浜平に散在する諏訪神社、不動様、琴平神社、大頭竜神社を舞って回ることである。カミマイリには、剣掛かりが舞われることなく、神の舞と花掛かり（花笠）あるいはミツアゲの組合せで舞っている。剣掛かりは、観音堂の庭で、また、11演目あるなかでも特に力のいる演目といわれ、熟練者で舞われ、奉納は後になっている。剣掛かりの構成は、デハ——ケンガカリ——ウタイ——ハナカサ——カエリフエである。剣掛かりの部分を見ると、剣を腰に差した袴姿の人を先頭に男獅子（若）、女獅子、男獅子（老）と舞う庭に進み、袴姿の人は庭に入るときに塩をまきながら庭を清めて入ってくる。庭を一回りすると袴姿の人と獅子は、所定の位置につき、舞が始まる。舞は、男獅子（若）、男獅子（老）、女獅子の順に剣を中心に舞い、剣に触れることはない。3頭が出揃い、しばらく舞うと、剣は庭を一回りして収められる。

荒川村下郷の獅子舞は、村回りと神社の奉納に舞が舞われる。剣掛かりは、浜平同様に村回りに舞われることなく、神社での奉納で、それも最後に、熟練者によって千秋楽の舞と一連の舞として舞われる。剣を持つ人の位置は浜平と同じで、舞の構成や芸態も同じである。

小鹿野町長留の獅子舞も同様に、村回りと神社（境内下にある舞台小屋）での奉納に舞われる。剣掛かりは、浜平と同様に、最後の方で舞われる舞である。剣を持つ人の位置は、観客に背を見せて座るが、舞の構成や芸態は同じである。

吉田町久長の獅子舞は、神社の境内で舞われるだけである。剣掛かりは、現在奉納の機会が少な

く、聞き取りからは、浜平、下郷、長留の獅子舞と同じ構成・芸態で、また、秩父市久那の獅子舞とも関係が深く、久那から伝えられた舞もあるという。このことから考えると、逆に久那の獅子舞はこのグループであろう。

このグループに登場する剣（以下、剣・太刀・刀と呼び方があるが剣と総称する）は、一振りである。

(2) のグループについて

大瀬の獅子舞は、神社に奉納する祭典と、村回りの祈祷に舞われる。ふるくは村回りの祈祷にも決まった家で太刀掛かりなどの掛け物を舞ったという。現在は、祭典で舞うだけである。太刀掛けの太刀を扱う大獅子は、最上位の演目で、だれでも演じられるわけではなく、練習はしても本番に舞えるのは師匠の許しがなければ舞えないことになっている。太刀掛けは、平舞と太刀掛けをミズという休息を挿んで連続して舞う舞である。その構成は、デハ——ヒラマイ——ミズ——タチ——ツノトギ——チャンギリである。平舞が終わると、師匠によって舞う獅子堂が塩で清められ、先達によって太刀とマトイが幣束の前に用意され、タチが始まる。大獅子がこの太刀を恭しく手に取り、まず四方固めを舞う。次に幣束の前のマトイを切りタチが終わる。マトイを切ることは、悪魔払いをするといい、切られたマトイを争って拾って帰り神棚に飾るという。獅子の羽根にも悪魔払いの力があるといい、これを拾って帰る人もいる。

獅子宿は現在も宝光寺であるが、古くは演目ごとに獅子宿から祓——塩湯——花笠——太刀——神幣——宮司——女獅子——中獅子——大獅子——笛吹き——氏子と行列をつくって獅子堂に来たという。また、この太刀を使って先達が病気などの祈祷も行ったという。

二丁目の獅子舞¹²⁾の太刀掛けは、千秋楽の舞として、また悪霊を払う舞として舞われる。舞の構成は、平舞——太刀掛け——ハイチ・ミズ——花取り——女獅子隠し——角研である。ハイチ・ミズでは、歌が歌われる。

戸ヶ崎の獅子舞の刀掛けは、ほとんど大瀬の獅子舞の太刀掛けと同じである。大瀬の獅子舞の太刀掛けに、個人の悪魔払いをする舞がついている。悪魔払いをしてもらう人は、幣束を持ち、赤い頭巾をかぶり、獅子の前に頭を下げて座る。獅子は、この人の背中に刀を当て、そして幣束と顔の間に刀をいれて、悪魔払いをする。しかし、悪魔払いは必ず刀掛けに連続して舞わなければならないということはない。独立してもよいことになっている。

このグループに登場する剣は、一振りである。

(3) のグループについて

金崎・国神（ふるくは、金崎村の下郷と上郷といわれ、祭りは一緒にやっていた）の獅子舞は、村回りをすることなく、金崎神社（金崎地区の神社）あるいは国神神社（国神地区の神社）の境内で舞われる。剣掛けは、国神地区の人によって舞われる国神方の舞だといい、中堅クラスの人によって演じられ、国神では最後に舞われる。剣掛けの構成は、ザブエ——ミチブエ——デハ——イリハ——ウタマイ——ホンマイ——（ナカナオリ）——ヒキハである。袴姿の人（歌方）を先頭に花笠、笛吹き、オオグリ、メジシ、コグリと行列をつくり舞庭に入ってくる。袴姿の人は、腰に

剣を差し、手に塩を持ちそれで舞庭を清めながら入ってくる。舞庭を一回転すると、所定の位置につき、舞が始まる。獅子は、注連の外から舞いながら注連の中に入ってくる。袴姿の人は、花笠の真ん中で剣を抜き、オオグリに見せるようにし、しばらくしてオオグリの口に剣を加えさせる。剣を加えたオオグリは、力を増し、メジシを背にコグリを制圧するように舞う。花笠の回りを1回転すると、剣は鞘に戻され、ナカナオリの舞を舞って剣掛かりが終了する。内容的にはオオグリが剣を加えて花笠の回りを1回転するとき、特に四隅に向かって強くコグリを制圧するのは四方固めの形式をとっている。また剣掛かりは悪魔払いのために舞うといったり、「ツッキレ」と掛け声が掛かるなど悪魔払いの要素も持っている。

門平の獅子舞は、村回りと神社での奉納に舞われる。剣掛かりは、神社で舞われ、それも最後である。舞の構成や芸態は、金崎・国神の剣掛かりとほとんど同じである。違いは、花笠、万燈、獅子がジグザグに入れ違いながら回転して舞庭に出入りする点である。いわば、舞いながら出入りしているといえる。また、剣掛かりは師匠ササラともいわれ、熟練者によって演じられている。

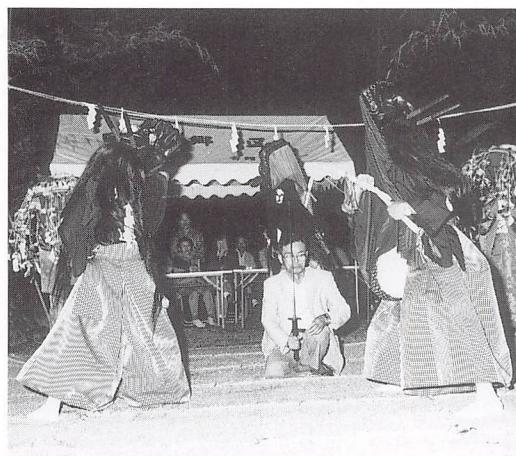
奈良尾の獅子

舞の剣掛かりは、まったく門平の獅子舞の剣掛かりと同じである。

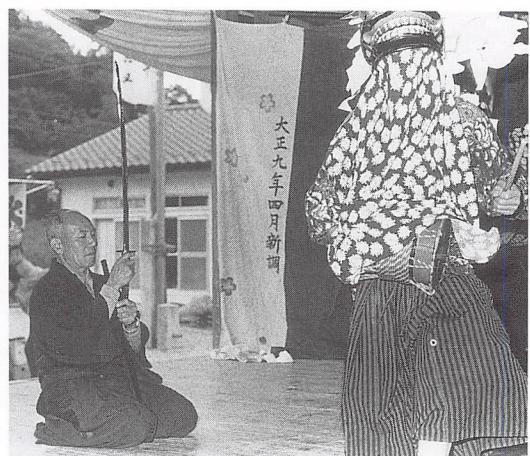
重木の獅子舞の剣掛かりは、構成や芸態は門平と同じである。⁽³⁾



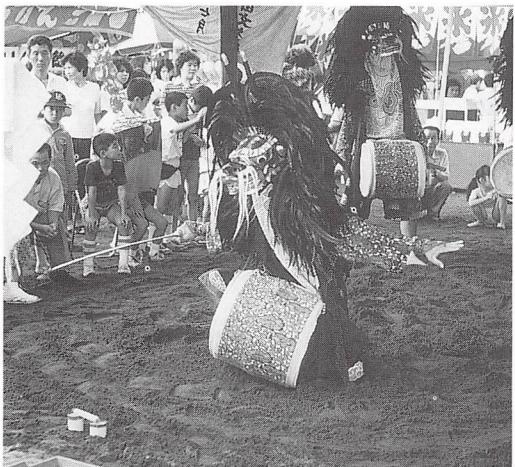
浜平の獅子舞



下郷の獅子舞



長留の獅子舞



大瀬の獅子舞



戸ヶ崎の獅子舞



金崎・国神の獅子舞



奈良尾の獅子舞



門平の獅子舞



浦山の獅子舞

大神の獅子舞の剣掛かりは、舞わなくなつて久しく、構成や芸態は不明である⁽⁴⁾。

阿熊の獅子舞の剣掛かりは、舞われなくなつて久しいという。舞は皆野町金崎から伝わったといい、また阿熊には剣が一振りあってそれを先獅子の頭が加えるという。このことから考えると、金崎の獅子舞の剣掛かりと同じといえる。

このグループに登場する剣は、一振りである。

(4) のグループについて

浦山の獅子舞は、昌安寺のお施餓鬼、諏訪様の祭り、丹生様の祭り、大日堂の祭りに舞われる。剣掛かりは、丹生様の祭り、大日堂の祭りに大日堂に祈願する人のための祈願サザラとして、また、村の氏子の希望者の家をお祓いして回る村回りの悪魔払いの舞として舞われる。

大日堂の祈願サザラは、6頭で行う場合と3頭で行う場合がある。どちらも同じ剣掛かりを舞う。毛附、川俣、細久保、金蔵、冠岩の五耕地氏子大祈願サザラは、お堂で大般若の行われている中で舞われる。祈願する氏子が拝殿の前にならび、太夫獅子と雄獅子の4頭に剣を加えさせ舞が始まる。しばらくすると、お堂を笛吹きを先頭に太鼓——氏子——道化——太夫獅子——女獅子——雄獅子と3回まわる。獅子は、この時拝殿前で力強く舞う。回り終えると、氏子は拝殿前の注連をはつた中にならび、獅子はこの回りを回って舞う。次に、歌が歌われる。これを終えると、氏子は退場し、獅子の終わりの舞になり、剣を外し祈願サザラが終わる。獅子は剣を加えるのに和紙で加えて押さえるようにしている。この和紙は、虫封じになると、歯痛によく効くなどと言われておりもあって帰る人もいる。

悪魔払いは、祈願サザラが終わった後に行われる。行列は、笛吹き、太鼓、「大日本獅子舞の由来」の入った箱を持つ歌謡、道化、太夫獅子、女獅子、雄獅子、花笠、青鬼、赤鬼、卍の紋を額にかざした鬼、鍾馗大明神と並ぶ。しかし、行列は崩れることもあるが歌謡、道化、獅子と青鬼、赤鬼、卍の紋を額にかざした鬼、鍾馗大明神は崩れることはない。鬼は、境内に張られていた注連縄を切り取りそれに五色の色紙を取り付けて体に巻き付け、手に持つ青竹も注連に使った竹を切り取って持つ。鍾馗大明神は、山からヒサカキを切り取ってきて、それに鍾馗大明神と書いた紙を付けた幣束を持つ。各家には、行列のとおり縁側から家を一回りするようにして玄関へ抜ける。中には抜けられない家もある。家の中では、笛吹きと歌謡が座敷に並ぶ家族を2回まわって抜ける。その時歌謡は、箱をかざし「悪魔を払いたまえ」と唱える。獅子も、同じように回り、家族を回るときに剣掛かりを舞う。次に、青鬼、赤鬼、卍の紋を額にかざした鬼、鍾馗大明神が「ウオー、ウオー、アクマバライ」などと叫びながら、青竹で地面や畳、床などを叩きながら同じように回って抜け、鍾馗大明神は最後に幣束をかざして「家内安全、商売繁盛」などと褒め言葉を言って抜ける。家の悪魔払いを終えると、村外れ（シモという）のショウトクタイシの前にきて、剣掛かりを途中で笛を切って舞い終える。すると直ちに、鍾馗大明神の幣束や今まで履いていた草鞋、鬼が身に付けていたものなどを剣で切って捨てる（このことを納めるとも言う）。これらには、悪魔が付いているので、人間が間違って身に付けないように剣で切って捨てるという。これで悪魔払いを終わる。悪魔払いは、基本的にはこの年に不幸のあった家で行われる。

浦山では、剣掛かりは最初に習う舞といい、この舞が舞えれば他の舞は早く覚えられるという。また、ここに登場する剣は、基本的には二振りである。

2 「白刃」

「白刃」は、白刃、太刀を含んでいる。それぞれは、次の比較である距離を見ると、さらに

- (1) 2 —— (1) 下名栗
- (2) 2 —— (2) 小杉
- (3) 2 —— (3) 朝日根 小杉
- (4) 2 —— (4) 芦ヶ久保 下名栗 萩平 北川 花桐 大野

と分けることができる。

(1) のグループについて

下名栗の獅子舞は、神社の境内で舞われるだけである。白刃は、千秋楽を伴い、最後に舞われ、下名栗の獅子舞にとっては最高の舞である。

白刃の構成は、デバヤシ——ワタリビヨウシ——ソロイ——デハ——チラシ（シラハ：サカキ——ハンシ——テヌグイ——コジリ——ハンクグリ——ホンクグリ——ウデ——アシ——キッパライ——名称なし1——名称なし2——名称なし3）——ウタイ——オカザキ——センシュウラク——ワタリビヨウシである。デバヤシ——ワタリビヨウシで露払い、笛吹き、塩、太刀使い、花笠、大太夫（オダイ）、女獅子（メジシ）、小太夫（コダイ）、花笠、氏子の行列が社務所から舞庭に進み、太刀使いは途中鳥居に取付けられたサカキを折り取る。ブッソロイで舞庭に揃い、デハで舞が始まる。また、ホワイ数人が行列とは別に舞庭に現われ所狭しと舞い、デハの頃には消える。シラハは、花笠の中に女獅子が隠れると、獅子と太刀使いによって12の部分舞が舞われる。サカキは、太刀使いが折り取ったサカキを手に持って獅子と舞う。ハンシは半紙を、テヌグイは手拭を持って獅子と舞う。コジリで獅子と舞いながら、太刀使いは「リンピョウトウシャカイテンレツザイゼン」と唱え、腰に差した剣を抜く。ハンクグリ、ホンクグリ、ウデ、アシ、キッパライは、抜いた剣を太刀使いが片手に持ち、獅子に見せるように振り回して舞う。ハンクグリ、ホンクグリで太刀使いは、獅子の羽根を切ることもある。切られた羽根は、悪魔払いになるといって、氏子などに分けられる。名称なし1、名称なし2は、太刀使いが剣を両手に持って獅子と舞う。名称なし3は、獅子を被る人の口に剣を加えさせ、太刀使いは上がり、獅子2頭が舞う。これは、太刀使いに剣をみせられた獅子は欲しくなり、それをもらって喜んで舞う舞という。この間、舞と舞の間には、必ず塩がまかれ舞庭が清められる。2頭は剣を外し、特に名称はないがケンカといわれる2頭の舞を舞い、しばらくして女獅子が加わって舞いシラハが終わり、ウタイになる。終わりの舞オカザキで白刃が終わる。センシュウラクは、氏子一同が舞庭の中央に集まり、拝殿に向かって千秋楽の歌を歌い、手注連をし、お神酒を回す。その後、獅子などは行列をつくりワタリビヨウシで社務所に帰る。

ここに登場する剣は、二振りである。また、獅子と剣の距離は(1)と(4)である。

(2) のグループについて

小杉の獅子舞は、神社で舞われるだけである。白刃は、最後に舞われる舞で、小杉の獅子舞にとっ



↑ 下名栗の獅子舞
(ホンクグリ)
(名称なし)

← 小杉の獅子舞
(キリアイ)
(サンパソウ)

ては最高の舞である。

白刃の構成はカイドウブエ——ドウチュウブエ——ギオンバヤシ——デハ・ハナガカリ——キリアイ——サンパソウ——アトニワ——モドリブエである。カイドウブエ——ドウチュウブエ——ギオンバヤシで先導するハイオイを先頭にして、花笠、中獅子、女獅子、大獅子、笛吹きと行列をつくり獅子宿から舞庭に進む。デハ・ハナガカリは、女獅子、中獅子、大獅子と順に舞に加わって舞い、仲良くお花畠で遊んでいるが、最後に女獅子の取り合いで中獅子と大獅子がケンカをし女獅子が花笠に隠れるという内容を舞う。キリアイは、2頭の獅子の口に剣を加えさせて2頭が切り合う舞で、お互一回転半ずつ攻めるように花笠の回りをまわる。サンパソウは、2頭の争いに嫌気がさし、2頭が加えていた剣を女獅子が手に持ちそれで髪を降ろして尼になるという舞である。女獅子は、七・五・三に足を踏んで舞い、踏み間違えると村に良くないことがあるという。サンパソウの頃になると、夕闇が迫りあたりが暗くなり、女獅子は提灯の明かりを頼りに舞う。アトニワは、3頭で舞う終わりの舞である。獅子一行はモドリブエで獅子宿に行列をつくって帰る。アトニワには、むかし歌が付いていたという。

言い伝えに、「寒ざさらは火事になる」とか、「寒中にさららのことを口にするな」とかいい、この期間は実際に獅子舞のことは触れないという。また、小杉の獅子舞は高山から伝わったという。獅子と剣の距離は(2)と(3)である。

ここに登場する剣は、二振りである。

(3) のグループについて

朝日根の獅子舞は、基本的には神社で舞われる。古くは、獅子を保管する新屋敷と呼ばれる家があってここから獅子衣裳を着け神社にいった。また、笠鉾を迎えるときは祭の前日に新屋敷で舞つてから牧の家と呼ばれる家に行き舞った。次の日、獅子は、牧の家で笠鉾と一緒にになって新屋敷に戻り、それから新屋敷と神社を往復して獅子舞を奉納した。現在は、獅子センターが新屋敷の役目をしている。

白刃は、最上級の舞で、比較的終わりの方で舞われる。白刃の構成は、イクフェ——デハ——シラハ——デタリヒッコンダリ——カエリフエである。舞庭の右前に注連縄を張り、そこに白刃を舞う前に拝殿より幣束を持ってくる。獅子一行は、剣を腰に差した笛吹きを先頭に花笠——女獅子——中頭——大頭——花笠と舞庭にくる。揃うと、神主がこの幣束で回りの人々のお祓いをし、舞が始まる。デハで女獅子が舞い始め、大頭、中頭を順に舞庭に引き出す。シラハで大頭と中頭が剣を加え、3頭が舞う。むかしはこの後に歌があったという。次に剣を外してデタリヒッコンダリとなって舞が終わる。

ここに登場する剣は二振りである。

(4) のグループについて

芦ヶ久保の獅子舞は、基本的には白髭神社で舞われる。白刃は、最後に舞う悪魔払いの舞で、また次に師匠になる人が舞う掛けり物といわれている。

白刃の構成は、コウジョウ——デハ——四方固め（女獅子、雄獅子、大雄獅子の順に舞う）——ケンガカリ——ホネッカエリ——ウタ——クズシ——ホネッカエリ——ウタ——クズシ——ヒキハである。獅子の行列は、竜源寺で一庭舞つてから出発する。また、行列は、竜源寺から白髭神社に来る時と白髭神社から獅子宿に戻るときのみつくられる。神社での奉納は、獅子が所定の位置に着くと始められる。白刃は、袴を着て腰に剣を差した師匠の「これにて千秋楽、悪魔払いのために舞う」という口上から始まる。四方固めが終わると雄獅子、大雄獅子を被る人の口に剣を加えさせ、女獅子の取り合いを演ずる舞を舞う。剣を加えるときに使った紙は、虫歯にならないとか歯が強くなるなどといって氏子たちはもらって帰る。

萩平の獅子舞は、笠鉾を引き出す常光寺と神社で舞われる。獅子舞は、神社の近くに獅子宿があつて演目ごとに獅子宿と神社を往復して舞われる。白刃は、最後の方で舞われる舞で、特に行列も他の掛けり物と違って、剣・塩持ち——天狗——笛吹き——花笠——大頭——女獅子——中頭——花笠と意義を正して舞われる。まず女獅子が舞い始め、次に大頭を、次に中頭を引き出して舞う。しばらくして、大頭と中頭を被る人の口に剣を加えさせシラハが舞われる。この間、女獅子は、朝日根の獅子舞と同じように花笠や獅子の回りで舞っている。萩平の女獅子は、全ての演目に女の着物を着て舞う。舞の構成は、ほとんど朝日根と同じである。

北川の獅子舞は、観音堂と神社で舞われる。白刃は、比較的最後の方で舞われる。舞の内容は、太夫と男獅子を被る人の口に剣を加えさせ、女獅子を取り合う舞である。舞の構成や芸態は、芦ヶ久保と同じである。



朝日根の獅子舞



芦ヶ久保の獅子舞



萩平の獅子舞



北川の獅子舞



大野の獅子舞

花桐の獅子舞は、神社に奉納される。白刃は、舞わなくなつて久しいというが、剣を加えられる人がいなくなつたので舞えなくなつたという。このことから、獅子を被る人が剣を加えたようである。

大野の獅子舞は、神社で舞われる。白刃は、大頭、中獅子を被る人の口に剣を加えさせ、花笠の中に入った女獅子の回りを、ハイオイが加わって基本的には大頭、中獅子が争うように舞う。舞の構成や芸態は、芦ヶ久保と同じである。

ここに登場する剣は、二振りである。

3 「剣の舞」

「剣の舞」には、剣の舞、太刀の舞を含んでいる。それぞれは、次の比較である距離を見ると、さらに

- (1) 3——(2) 下戸田
- (2) 3——(3) 池田 渡瀬

と分けることができる。

(1) のグループについて

下戸田の獅子舞は、神社の奉納と村回りの祈祷に舞われる。剣の舞は、構成は少し異なるが、両方で舞われる。

下戸田の獅子舞の舞の構成は、小獅子のデハ——中獅子のデハ——トウリンリ——ドジョウフミ——ドニワクサ——親獅子のデハ——ウタマイ・ウタ——カグラマイ——タチノネライ——タチノマイ——サンボウ——ドニワクサ——ハナガカリノマイ——ヘビノミノマイ（あるいはメジシカクシ）——コシヌケ（クジキリ）——アゲフエ——オチャノレイである。神社での奉納は、この構成で舞われる。村回りの祈祷は、ブッカブリあるいは祈祷の舞と称するタチノネライ——タチノマイを省略した舞が舞われる。村回りの行列は、旗持ち——幣束持ち——太刀持ち——花笠——小獅子——花笠——囃子（笛吹き）——中獅子——親獅子——世話人である。ミヤショウデン、オカザキ、ヒツトヤ等が吹かれる中を行列は進み、民家にくると世話人がお札を渡し、獅子は庭で祈祷のブッカブリを舞う。ブッカブリは、親獅子が太刀持ちの持つ剣を抜き、それを手に持って舞い、終わると剣を鞘に戻す。獅子一行は、舞い終わると家人の接待を受ける。この舞は、剣の力によって悪魔や疫病を払う舞という。また、この剣を使って獅子舞とは別に祈祷もするともいう。

ここに登場する剣は、一振りである。

(2) のグループについて

渡瀬の獅子舞は、神社の奉納と村回りに舞われる。剣の舞は、村回りを終えて神社に戻って舞われる。

剣の舞の構成は、サワイリ——ツルギノマイ——オワリノマイである。サワイリは、神社の鳥居近くから、先獅子——中（女）獅子——後獅子、ヒョットコ——カンカチのふたつの行列をつくつて舞庭に練りこむ舞である。ツルギノマイは、中獅子の奪い合いの舞といい、中獅子が花笠の中に入つてから舞われる。まず介添えは先獅子の頭に剣を加えさせ、次に後獅子の頭に剣を加えさせる。獅

子には、それぞれにカンカチが一人ついて舞う。獅子が剣を加えて舞庭に飛び出すとき、介添えによって塩がまかれる。歌は獅子が舞っている途中に歌われる。最後に、剣を外し、中獅子も加わってオワリノマイを舞って剣の舞が終わる。

池田の獅子舞は、村回りと神社の奉納に舞われる。剣の舞は、村回りが終わって神社に戻ってきて舞われる。

剣の舞の構成は、サワイレ——ミヤマイリ——ブッソロイ——ツルギノマイ・ウタイ——オワリノマイである。舞の構成や芸態は、ほとんど渡瀬の獅子舞の剣の舞と同じである。

ここに登場する剣は、二振りである。



下戸田の獅子舞（ブッカブリ）



渡瀬の獅子舞



池田の獅子舞

4 「宿割り」

「宿割り」は、四句割り、宿割りを含んでいる。それぞれは、次の比較である距離を見ると、(3)のみである。

(1) 4——(3) 黒谷 下三沢 皆野

下三沢の獅子舞は、神社に奉納されるだけである。四句割りは、三役ザサラといわれ上級者の舞で、最後の方で舞われる。

四句割りの舞の構成は、シャギリ——ヒンダシ——名称不明——シクワリ——ヒッコミである。シャギリは、獅子一行の行列が出発する前の笛の音である。ヒンダシで獅子一行（曳き手——花笠——笛吹き——仲立ち——先獅子——女獅子——後獅子）は、舞庭に入る。名称不明で舞庭に揃う。シクワリは、3頭がまず一緒に舞い、ついで女獅子が花笠の間に入り、先獅子と後獅子の頭に剣を加えさせ、仲立ちに曳かれるように2頭が並んで花笠の回りをまわって舞う。この間仲立ちは、歌を歌う。次に剣を外し再び3頭がそろって舞う。この間の事情を、3頭の獅子が仲良くお花畠で遊んでいると思いがけない霧で女獅子が見えなくなってしまい、この霧を切り払うために獅子が剣を加えて剣の力で霧を切り払い、再び女獅子を見付け仲良く遊ぶという。ヒッコミで獅子一行が舞庭を後にし、四句割りが終わる。

皆野の獅子舞は、神社に奉納される。宿割りは、終わりの方で舞われ、熟練者が舞う舞である。舞の構成や芸態は、ほとんど下三沢と同じであるが、獅子が剣を加えて曳き手と花笠の回りをまわるとき脚を組んでいる点が違っている。

黒谷の獅子舞は、神社に奉納される。宿割りは、大人が舞う舞で、終わりの方で舞われる。舞の構成や芸態は、ほとんど下三沢と同じである。

ここに登場する剣は、二振りである。

5 「その他」

「その他」は、追太刀舞、さんぎり、天狗の舞、辻ぎりを含んでいる。それぞれは、次の比較である距離を見ると、さらに

(1) 5——(1) 銚子口 下間久里

(2) 5——(2) 西金野井 赤沼

と分けることができる。

(1)のグループについて

銚子口の獅子舞は、神社に奉納される。天狗の舞は、最初に舞われる舞で、天狗を先頭に獅子（太夫・中獅子・小獅子）——大太鼓・小太鼓・笛吹き——供物を持つ氏子が行列をつくって鳥居より境内に入り、さらに社殿を時計回りにまわり舞庭に進み、天狗が獅子を伴って舞う舞である。舞庭にくると獅子は、天狗の後について回り、その他の人は所定の位置に付く。

また、この舞は天狗が3頭の獅子を従えて四方を踏み鎮める舞という^⑤。

下間久里的獅子舞は^⑥、神社の奉納と村回りに舞われる。辻ぎりは、村回りの最後に獅子ではなく

太夫によって舞われる舞である。獅子3頭が「津島」「はや」の舞を舞う。この舞が終わると、太夫が一步前に出て刀を抜き、右手に刀、左手に御幣を持って舞う。獅子は、後に控えて太鼓を打つ。この太夫の舞は「辻切り」といい、村中の悪魔を追いつめて、ここで追い出すという。また、かつて舞われていたが、現在舞うことができない演目には、「三番叟」「中獅子の出端」「弓くぐり」「太刀の舞」の4つがあるという。

ここに登場する剣は、一振りである。

(2) のグループについて

西金野井の獅子舞は、神社の奉納と村回りに舞われる。辻ぎりは、村境で村の内側から外に向かって舞われる舞で、天狗が持つ幣束を先頭に、太夫獅子が剣を手を持って他の獅子と一緒に舞う。

また、民家では神刀を抜き、悪魔払いが行われてきた^⑦という。

赤沼の獅子舞^⑧は、神社の奉納と、奉納後、依頼された民家で舞われる。三番叟は神社で最初に舞われる太夫1頭の舞である。太夫は右手に刀、左手に巻物をつけたバチを持ち、四方で九字を切る動作をするという。夏の厄除けや病気の回復を願って舞う民家でのさんぎりは、太夫1頭の舞で刀を持って舞うという。

ここに登場する剣は、一振りである。

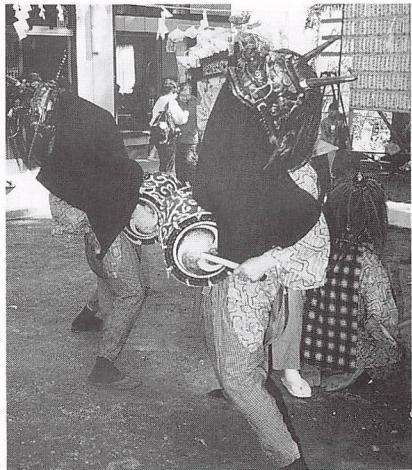
提示できる『剣掛かり』は、以上である。提示できなかった三峰、影森、久那、矢行地、煤川、大神、唐沢、高山、中手子林、千塚については、検討する中で推察する。



下三沢の獅子舞



皆野の獅子舞



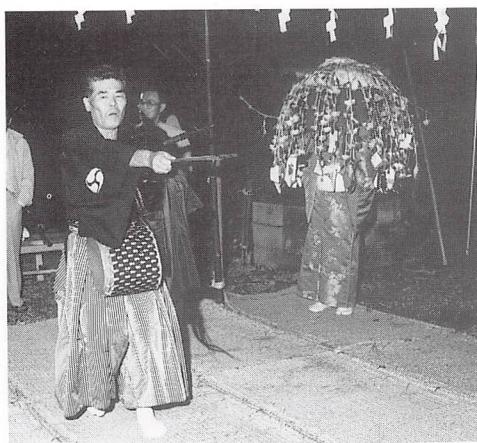
黒谷の獅子舞



銚子口の獅子舞



西金野井の獅子舞



下郷の獅子舞（千秋楽の謡）

事例の検討

事例を提示したことによって、

- (1) 名称が違っていても同じような構成・芸態をしている。
- (2) 剣と獅子の距離が違っていても、同じような構成、芸態をしている。

のことがわかった。しかし、それぞれのグループ内においては、基本的には同一内容であることがわかった。

そこで、このグループを基に、舞の構成、内容、芸態、資格、信仰などについて検討する。

1 舞の構成について

舞の構成は、①序の舞、②歌、③本舞、④結びの舞⁽⁹⁾と言葉を統一して検討する。

1——(1)のグループは、①——③——②——④である。 剣：1

浜平・長留・久長は、この構成をしている。下郷は、千秋楽を伴っており、この後に千秋楽の謡がつく構成をしている。しかし、基本的には、①——③——②——④である。

1——(2)のグループは、①——③——④である。 剑：1

大瀬は、この構成をしている。戸ヶ崎は、③の中に悪魔払いの舞を伴っている。悪魔払いの舞が終われば④になるので、構成的には同じといえる。しかし、2丁目は、本舞の後にハイチあるいはミズと呼ばれる歌が歌われる。したがって、二丁目は、①——③——②——④である。

1——(3)のグループは、①——②——③——④である。 剑：1

1——(4)のグループは、①——③——②——④である。 剑：2

浦山は、この構成の他に悪魔払いの舞の構成もある。悪魔払いの舞の場合、獅子は、舞ながら民家に入っていき、一気に舞い、出て行くので③のみと考える。

2——(1)のグループは、①——③——②——④である。 剑：2

下名栗は、千秋楽を伴っているが、基本的にはこの構成である。

2——(2)のグループは、①——③——②——④である。 剑：2

2——(3)のグループは、①——③——②——④である。 剑：2

2——(4)のグループは、①——③——②——④である。 剑：2

萩平は、歌が歌われないので①——③——④となる。

3——(2)のグループは、①——②——③——④と①——③——④である。 剑：1

下戸田は、神社で舞われる舞とヅカブリの舞があり、神社での舞の構成が前者で、ヅカブリの舞の構成が後者である。

3——(3)のグループは、①——③·②——④である。 剑：2

4——(3)のグループは、①——③·②——④である。 剑：2

5——(1)のグループは、①——③——④と③である。 剑：1

銚子口の天狗の舞の構成は前者で、下間久里の辻ぎりの構成は後者である。

5—(2)のグループは、①—③—④と③である。剣：1

西金野井の辻ぎりの構成は後者である。下間久里の辻ぎりから考えると、赤沼のさんぎりは後者で、また三番叟は銚子口の天狗の舞から考えると前者であろう。

したがって、以上のことから舞の構成は、

- 1 ①—③—②—④は、1—(1)・(4)、2—(1)・(2)・(3)・(4)である。(図2：●)
- 2 ①—③—④は、1—(2)、2—(4)、3—(2)、5—(1)・(2)である。(図2：■)
- 3 ①—②—③—④は、1—(3)、3—(2)である。(図2：▲)
- 4 ①—③・②—④は、3—(3)、4—(3)である。(図2：△)
- 5 ③は、1—(4)、5—(1)・(2)である。(図2：□)

と分けることができる。

次に、祭りの中での『剣掛かり』の構成を考える。

舞の順番は、多くは最後あるいは最後の方で舞われる。1—(4)の浦山は、2日間専門に舞われる。3—(2)の下戸田は、基本的には演目はひとつであるから順番は関係ない。5—(1)の銚子口と5—(2)の赤沼は、最初に舞われる。また、5—(2)の西金野井は順番に関係なく村境にくれば舞われる。

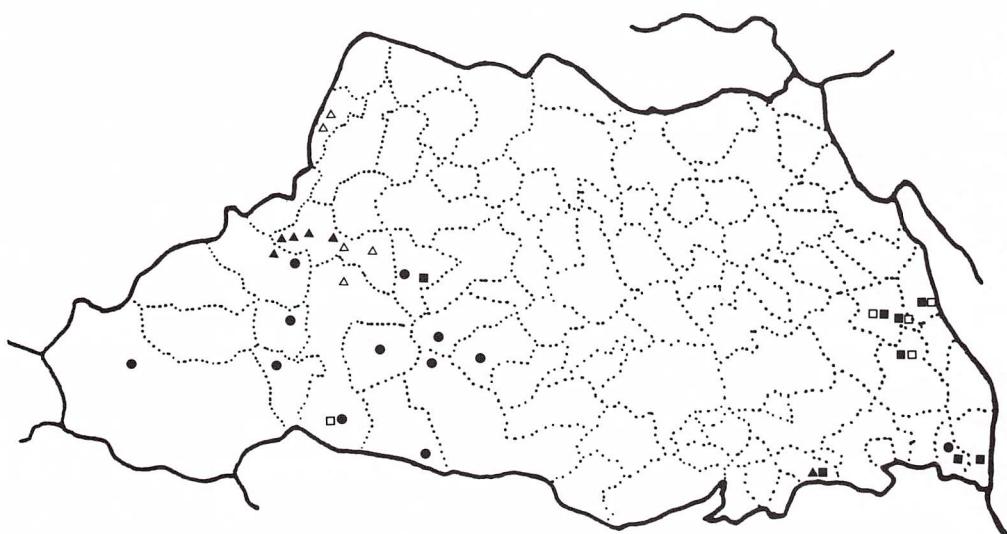


図2 『剣掛かり』の構成による分布

2 舞の内容・芸態、演者の資格について

『剣掛かり』を舞の内容と芸態から検討する。

珍しい剣があつてそれになかなか近付けなく剣の力に圧倒されるという内容を舞うのは、1——(1)の浜平である。芸態は、剣を中心に3頭が舞庭を回っており、このグループは同じ動きをする。(図3：○)

珍しい剣を見つけそれを加えて力を増し相手を威圧するという内容（部分名にナカナオリという舞があることから見た目には女獅子の取り合いといえる）を舞うのは、1——(3)の金崎・国神である。芸態は、オオグリが剣を見つけてその剣を加え、女獅子を背に膝をついたコグリを追って舞庭を一周する。次に、剣を外して3頭がナカナオリの舞をそろって舞う。動きから考えると、このグループは同じである。(図3：●)

仲良く遊んでいると女獅子のことで男の獅子の仲が悪くなり剣を加えて女獅子の取り合いをするという内容を舞うのは、2と3——(3)である。芸態は、剣を加えて2頭が舞う喧嘩の部分と剣を外して仲直りあるいは女獅子の仲裁の部分で構成されており、最も変化に富んだ芸態で、グループ内においても獅子舞毎に特徴がある。このグループには、1——(3)を加えることができる。(図3：●)

仲良く遊んでいると霧が出てきて女獅子が見えなくなり女獅子を見つけるために2頭が剣を加え協力して霧を切り払うという内容を舞うのは、4——(3)の下三沢と皆野¹⁰である。芸態は、女獅子が花笠の中に入りその回りを獅子と仲立ちが歌を歌いながら回る。この動きをするのは、同グループの黒谷も同じである。(図3：□)

霧の中で靈力のある剣をみつけそれを手に持って霧を切り払うという内容を舞うのは、1——(2)の大瀬である。芸態は、剣を大獅子が手に持ち四隅の柱に向かって剣を振り降ろす。次に中央に置いてあるマトイを切る。この動きをするのは、このグループの戸ヶ崎で、この前半を行うのは二丁目である。(図3：▲)

悪魔払いをするという内容を舞うのは、1——(4)、3——(2)、5——(1)の下間久里と5——(2)の西金野井である。芸態は、獅子が剣を加えて舞庭を回転する1——(4)と太夫あるいは獅子が剣を手に持って一方向に向かって舞う3——(2)、5——(1)・(2)に分かれる。(図3：■)

剣を手に持って四方固めをするという内容を舞うのは、5——(1)の銚子口と5——(2)の赤沼である。芸態は、天狗あるいは獅子が剣を片方の手に持って4方向に動く。(図3：△)

以上のとおりである。『剣掛かり』は、剣に何らかの力があつてその力を借りて不都合なことを解決するという内容を舞っていることがわかる。

演者の資格は、演目の構成からも獅子舞を代表する舞であり、誰でもが舞えるわけではない。『剣掛かり』が舞える人は、多くは熟練者である。練習も、かなり他の演目がうまく舞えると見られる人が始めるところが多い。1——(4)の浦山は、基本舞が揃っているので、最初に習う舞という。しかし、祭りでは、剣掛かりが舞われることが一番多い。『剣掛かり』が熟練者によって舞われるという点はほとんどの獅子舞で言われることで、また、舞い終えると師匠クラスに仲間入りするとも言われており、このことを考えると、村の社会構成や獅子舞組織から考えなければならないことが多いが、『剣掛かり』が村の人材を育成するひとつのステップになっていることがわかる。

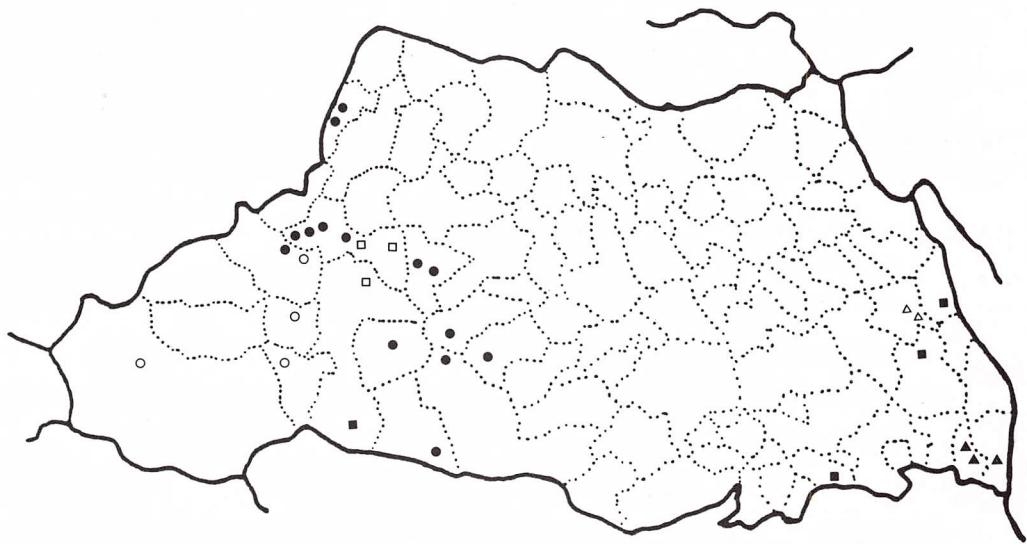


図3 『剣掛かり』の内容・芸態による分布

3 信仰について

『剣掛かり』を悪魔払いに舞うというところは、1——(2)、1——(3)の金崎・国神、1——(4)、2——(4)の芦ヶ久保、3——(2)、5——(1)の下間久里、5——(2)である。

舞庭が塩で清められるのは、3——(2)、5——(1)・(2)以外である。舞庭の四方を清める舞は、5——(1)の銚子口と5——(2)の赤沼である。3——(2)のヅッカブリ、5——(1)の下間久里と5——(2)の西金野井の辻ぎりは、塩で清められることもなく、四方を清める舞で清められることもない。

2——(4)の下名栗、芦ヶ久保、北川は、獅子を被る人が剣を加えるのに用いた「紙」を、虫封じとか歯が強くなるとか3——(3)の渡瀬はオカイコのはきたてに使うとかいってもらって帰る人がいる。

1——(2)の大瀬と2——(1)は、獅子の頭の羽根は悪魔払いになるといって、落ちた羽根や切り落とされた羽根をもらって帰る人がいる。

1——(2)の大瀬と戸ヶ崎^⑩は、切られたマトイや幣束は悪魔払いになるといつてもらって帰る人がいる。

以上のことから、『剣掛かり』を積極的に悪魔払いの舞として舞っているところは、1——(2)・(4)、3——(2)、5——(1)の下間久里と5——(2)の西金野井と赤沼で、多くは県東南部に見られる。また、消極的ではあるが悪魔払いとして舞うところは、1——(3)の金崎・国神、2——(4)の芦ヶ久保である。このことから、『剣掛かり』はこれのみを抜き出して考えるより、獅子舞を伴った祭りの構造から考えることが必要である。

ま　と　め

以上のことから『剣掛かり』は、舞の構成、内容、芸態に地域的変化があることがわかった。これらを基に『剣掛かり』の系統を考える。

舞の構成は、①—③—②—④、①—③—④、①—②—③—④であることが多いことがわかった。

①—③—②—④の構成は、浜平、下郷、長留、久長、二丁目、浦山、下名栗、小杉、朝日根、芦ヶ久保、北川、花桐、大野で見られた。このことをそれぞれの獅子舞が演ずる他の演目と比較すると、ほとんどがこの構成をしている。

①—③—④の構成は、県東南部（大瀬、戸ヶ崎、下戸田、銚子口、赤沼）と萩平に見られた。この構成はそれぞれの獅子舞が演ずる他の演目にも見られる。しかし、図2のとおり、これらの周辺には歌を伴った『剣掛かり』は存在しており、このことから歌が欠落したものを継承してきたと考えることができる。

①—②—③—④の構成は、金崎・国神、重木、奈良尾、門平、阿熊で見られた。このことをそれぞれの獅子舞が演ずる他の演目で比較すると、金崎・国神は③—②や③・②の構成もしている¹²。また、金崎・国神は獅子を終え親方になると舞を創作するという伝統があり、このことから考えると舞の構成に創意工夫がされた結果のひとつともいえる。下戸田は、『剣掛かり』の構成という範囲をこえており、②の後に③が数種類連続して構成されており、この結論から除外する。ただし、大きく③が数種類連続していることをひとつと見れば、このグループであるといえる。

①—③・②—④の構成は、池田、渡瀬、黒谷、下三沢、皆野で見られた。このことをそれぞれの獅子舞が演ずる他の演目と比較すると、下三沢はほとんどが①—③—②—④の構成をしている¹³。したがって、③・②の構成は『剣掛かり』を創作する段階で考えられたとすることができる。

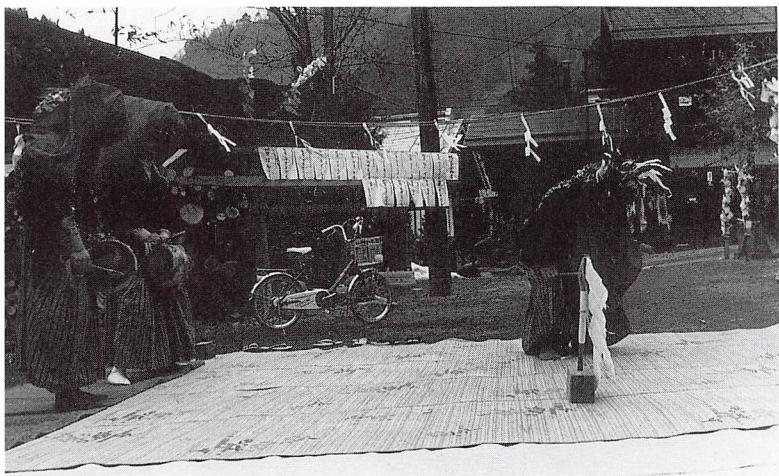
③の構成は浦山、下間久里、西金野井、それに戸ヶ崎に見られた。舞の行われる場や内容が今までの『剣掛かり』とは異なり、民家や村境であったり、悪魔払いや厄払いであったりしている。したがって、『剣掛かり』の剣に注目して③のみを抜き出して構成したといえる。

以上のことから、『剣掛かり』は ①—③—②—④の構成を中心に変化したと考えられる。

次に、内容と芸態の変化である。この変化は、舞の構成で考えた①—③—②—④の構成から始まったと考える。また、起源は、ほとんどの獅子舞が演じる『幣掛かり』にあるとする。

『幣掛かり』は、①—③—②—④の構成、見えない力を持つ神の依り代である幣束あるいは御幣を中心に獅子が舞うという内容、また、幣束あるいは御幣を中心にして獅子がその回りを回転する芸態をしている。先に述べた『剣掛かり』は、この『幣掛かり』と同じ構成、内容、芸態であることがわかる。

獅子舞の村回りは、神の依り代の幣束を持つ天狗あるいはサルタヒコなどが先頭になって回ることが多く見られる。このことから、まず、『幣掛かり』から依り代の幣束を腰に差し（コシオンベと呼ばれる）て舞う剣掛かりを創作し、一方、幣束を手に持つて舞う幣掛かりが創作された。それが、



浜平の獅子舞（1本幣）



銚子口の獅子舞（幣掛かり）

第3者が剣を持つ浜平、下郷、長留、久長の剣掛かりで、内容、芸態は『幣掛かり』である。一方が下戸田の神楽舞、獅子口の幣掛かりである。

後者の神楽舞と幣掛かりは、獅子あるいは太夫が剣を持つ下戸田や下間久里の太刀の舞、赤沼の三番叟と芸態を変えた。太刀の舞と三番叟は、祈祷の影響を受け、大瀬、二丁目、戸ヶ崎の太刀掛かりとなり、さらに、下戸田のブッカブリ、西金野井と下間久里の辻ぎり、赤沼のさんぎりと発展した。これから、さらに戸ヶ崎の悪魔払いへと発展した。この悪魔払いに類する伝承は、下戸田や大瀬でも聞くことができる。

一方、前者の剣掛かりは、『女獅子隠し』の影響を受け、獅子の頭に剣を加えさせる金崎・国神、重木、奈良尾、門平、阿熊の剣掛かりと名称をそのままにして発展した。

さらに、この剣掛かりは、『花掛け』の影響を受け、女獅子を花笠の中に入れ、剣の数を増やし『花掛け』の内容を前面に出した黒谷と皆野の宿割りと下三沢の四句割りと、また、『女獅子隠



浜平の獅子舞（村回りの行列：幣束を持つ天狗）



西金野井の獅子舞（村回りの行列：幣束を持つ天狗）

し』の影響をそのまま受け、剣を増やし、同時にカンカチを伴う獅子舞の影響を受け、池田、渡瀬の剣の舞へと分化した。

宿割りと四句割りは、『女獅子隠し』の内容を復活させ、女獅子を花笠の外に出し3頭が一緒に舞う芸態に変えた朝日根の白刃に変化した。朝日根は、この演目のために衣裳まで変えている。

朝日根の芸態から、獅子を被る人が剣を加えた芦ヶ久保、花桐、北川の白刃と、また、女獅子に女性の着物を着せた萩平の白刃と分化した。萩平の芸態のうち女獅子を花笠の中に入れたのが、大野の白刃である。小杉の白刃も朝日根の白刃の影響を受け、特に女獅子に剣を持たせて三番叟を舞わせ、芸態、内容とも発展させた。

芦ヶ久保、花桐、北川の白刃は芸態を変え、獅子が太刀使いと一緒に舞う下名栗の白刃と悪魔払いの影響を受け悪魔払いの舞を舞う浦山の白刃に分化した。下名栗の白刃も内容、芸態ともによく発展した舞となっている。また、浦山の白刃は、余計なものを取り去りすっきりした舞にし、この舞を取り入れた悪魔払いの行事は青鬼、赤鬼、卍の紋をかざした鬼、鍾馗大明神を登場させ演劇的にも発展させている。

この系統に組み込めなかった三峰、影森、久那、矢行地、煤川、大神、唐沢、高山、中手子林、千塚を推察する。

久那の剣掛かりは、久長との関係を伝承から知ることができるので1——(1)の剣掛かりになる。三峰、影森、煤川の剣掛かりも、地域あるいは名称から最初の1——(1)の剣掛かりになる。矢行地は、太刀掛けと白刃の二つの演目を演すことから、また、地域を考えると、最初の1——(1)の剣掛けと2——(4)の白刃となる。

大神、唐沢の剣掛かりは、地域あるいは名称から1——(3)の剣掛けであろう。

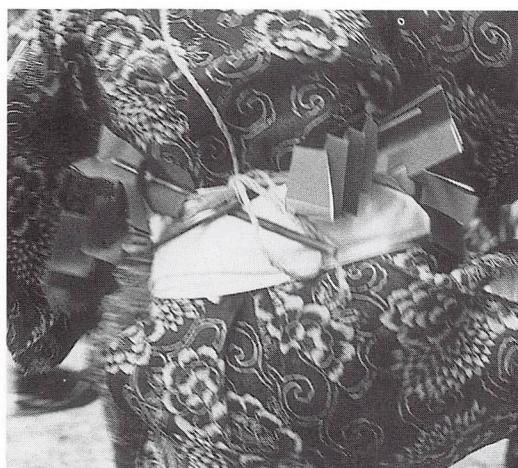
中手子林の追太刀舞は、地域あるいは名称から5——(2)の辻ぎりであろう。

千塚の太刀は、この他の演目に辻というものもあったということから、5——(2)の太刀の舞と辻ぎりになる。

下間久里の太刀の舞は、名称からもうひとつの演目に辻ぎりがあることから5——(1)の天狗の舞と5——(2)の三番叟と辻ぎりであろう。

高山の白刃は伝承から小杉に教えたというので、2——(3)の白刃と同じであろう。

以上のことと系統図にすると図4のとおりである。



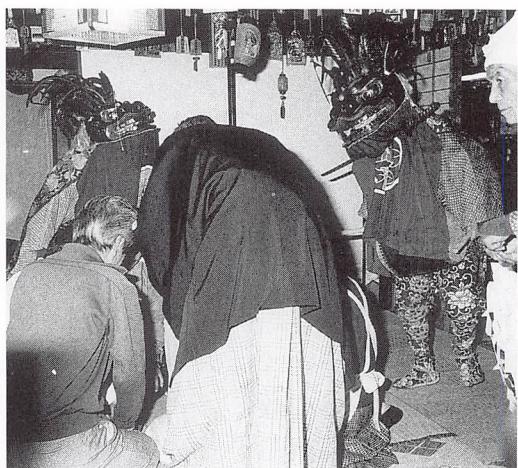
下名栗の獅子舞（腰に差した幣束）



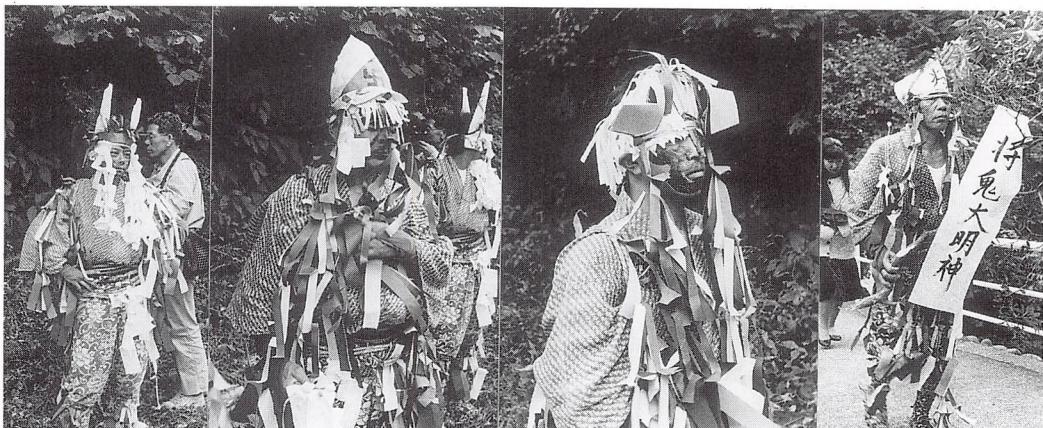
萩平の獅子舞（女の着物を着た女獅子）



戸ヶ崎の獅子舞（悪魔払い）



浦山の獅子舞（悪魔払い）



浦山の獅子舞（鬼たち）

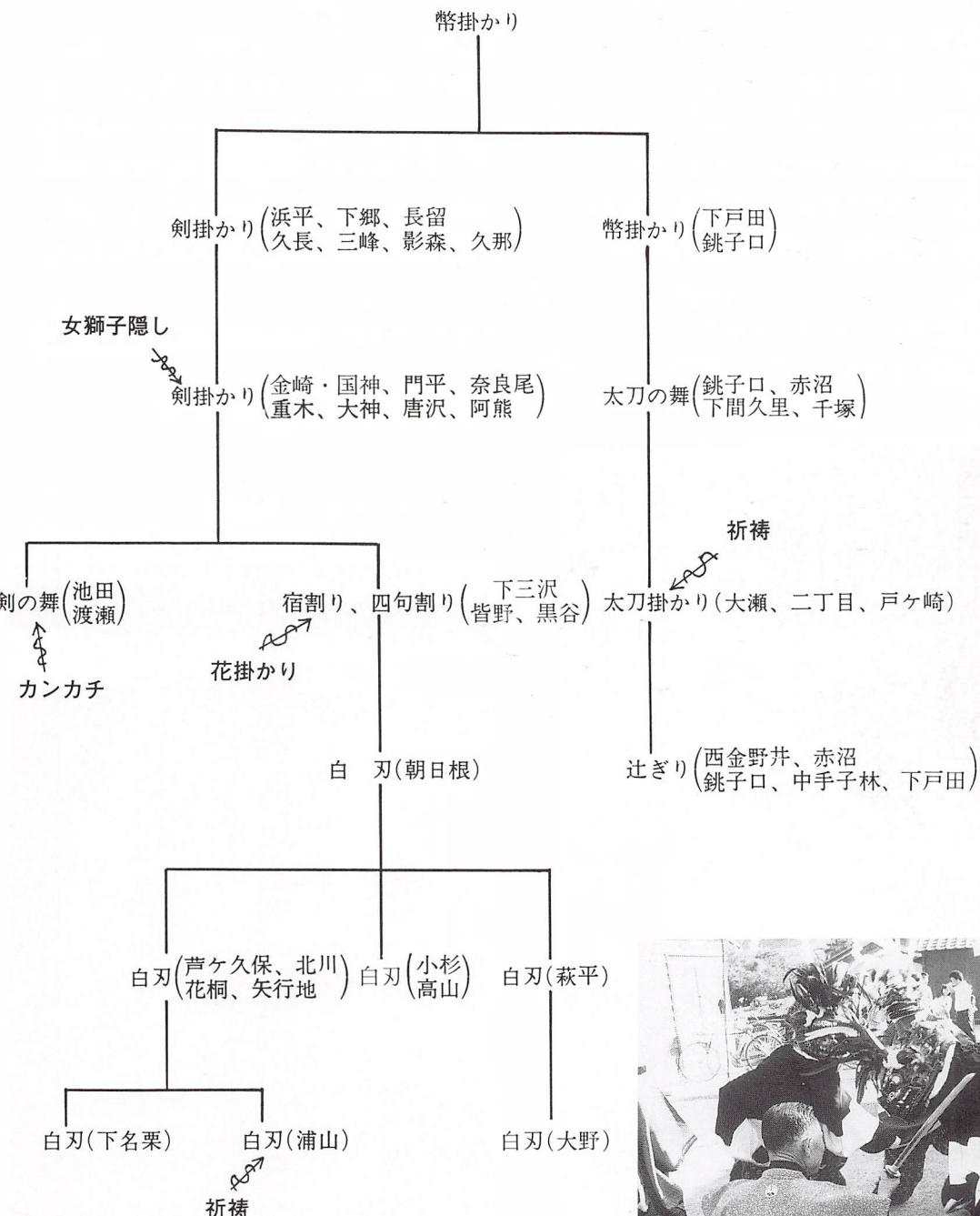


下名栗の獅子舞（女獅子隠し）



八日市(神川町)の獅子舞(カンカチ)

図4 『剣掛かり』の系統図



金崎・国神の獅子舞（剣に掛かるオオグリ）

最 後 に

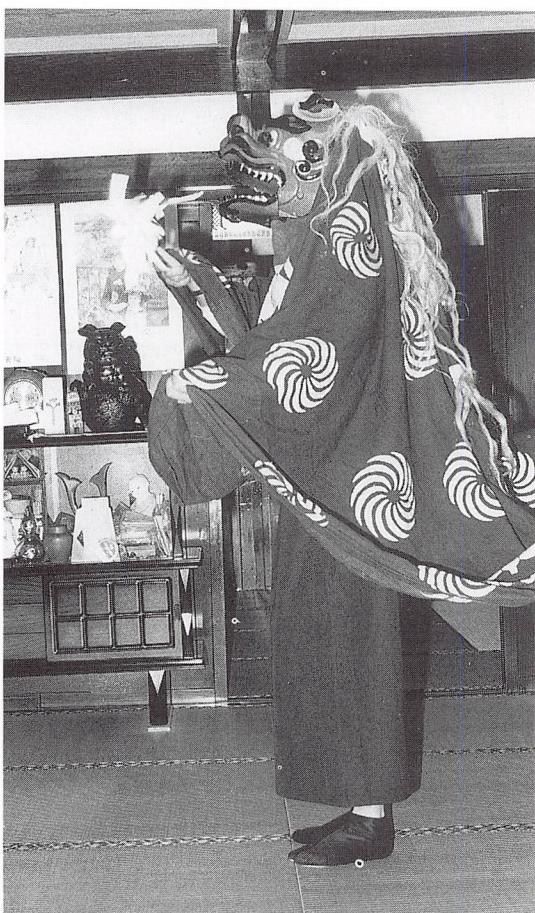
獅子舞の演目一つ『剣掛かり』を考えてきた。『剣掛かり』は、「白刃」の段階でよく発達していること、事例の検討のなかで指摘したように祭りの構造から検討すべきことが多く残されていることがわかった。今回は埼玉県という行政区分に拘ったために問題点を多く残しており、他県の情報（特に群馬県、東京都、千葉県）を取り入れて、もう一度系統を考える必要がある。県内の事例からも、下名栗や浦山などは東京都の奥多摩地域から伝承されたということがわかっており、また、芸態から大神楽獅子系統の内容も感じられるので、したがって、これらも含めて再度考えることにする。

調査においては、獅子舞関係者には行く先々で写真撮影や聞き取り調査に御協力をいただいた。厚く感謝の意を表したい。



安行藤八（川口市）の獅子舞
(大神楽獅子系の獅子舞と幣束)

石原（飯能市）の獅子舞
(大神楽獅子系の獅子舞と幣束)



- 註1 地域的な偏りを持たない演目は、『幣掛かり』『花掛け』である。この他の演目は、何らかの偏りが見られる。
- 註2 八潮市教育委員会（1988）より
- 註3 金子款氏の御教示による。
- 註4 同上
- 註5 飯塚好（1984）より
- 註6 埼玉県立民俗文化センター（1982）より
- 註7 埼玉県教育委員会（1982）より
- 註8 飯塚好（1984）より
- 註9 倉林正次（1970）、埼玉県教育委員会（1972）より
- 註10 皆野町（1986）より
- 註11 戸ヶ崎の太刀掛けに関する伝承は、つぎのとおりである。むかし、洪水でこの地域は水浸しになった。桜堤を切れば助かるということで、人々は桜堤を切りに獅子頭を担いで堤を切り出かけた。この時、モヘイとイワドという人が濁流に飲み死んでしまった。太刀掛けの舞は、この二人をあらわすお茶碗二つを揃え、桜堤をあらわす桜の枝をこのお茶碗に掛け渡し堤を切る舞を舞うという。切られた桜の枝は、悪魔払いになるといつてもらって帰る人がいる。大瀬とは内容が違っている。
幣束は、幣神といい役獅子（初庭の舞を舞う人と太刀掛けを舞う人のことをいう）が身に着ける。幣神の木は神社に返すが、紙はもらう人がいるという。幣神は、この他に少し大きめのものもあり、これは神社から持ち出し、悪魔払いはこれを持つ。終われば神社に返す。
- 註12 小野寺節子（1988）より
小野寺による剣掛けの構成は、①—③—②—④である。小野寺の調査の時は、この構成で舞っていた。その後、地元獅子舞保存会の研究の結果、古くは①—②—③—④の構成であったとわかり、剣掛けの構成をかえ、現在にいたっている。
- 註13 内籠ふみ・石川博行（1988）より
- 註14 埼玉県教育委員会（1972）・（1972～1980）・（1982）、秩父郡両神村役場（1988）、金子款氏の御教示、および筆者の調査による。

参考文献

- 埼玉県教育委員会（1972～1980）：埼玉県市町村誌
- 埼玉県教育委員会（1972）：埼玉の獅子舞
- 埼玉県立民俗文化センター（1984）：民俗芸能公演プログラム第17号
- 埼玉県立民俗文化センター（1985）：民俗芸能公演プログラム第21号
- 埼玉県立民俗文化センター（1986）：民俗芸能公演プログラム第27号
- 埼玉県立民俗文化センター（1988）：民俗芸能公演プログラム第36号
- 埼玉県立民俗文化センター（1980）：展示解説
- 埼玉県立民俗文化センター（1982）：埼玉県民俗芸能調査報告書第1集 下間久里の獅子舞
- 埼玉県立民俗文化センター（1988）：三沢の獅子舞(LPレコード)埼玉の民俗音楽獅子舞シリーズ2
- 埼玉県立民俗文化センター（1989）：下名栗の獅子舞(LPレコード)埼玉の民俗音楽獅子舞シリーズ3
- 飯塚好（1984）：獅子舞考—基本構造と多様性— 埼玉県立民俗文化センター研究紀要創刊号
- 内籠ふみ・石川博行（1988）：三沢の獅子舞における曲目の構成と伴奏旋律埼玉県立民俗文化セ
ンター研究紀要第5号
- 小野寺節子（1988）：金崎獅子舞における曲目の構成と伴奏 埼玉県史研究第21号
- 埼玉県（1986）：埼玉県史 民俗2 別冊編2
- 埼玉県教育委員会（1982）：埼玉県民俗芸能緊急調査報告書第4集 獅子舞の分布と伝承
- 八潮市教育委員会（1986）：八潮市の文化財第2集
- 八潮市教育委員会（1988）：八潮市の文化財第3集
- 飯能市（1983）：飯能市史資料編IV（民俗）
- 倉林正次（1970）：埼玉県民俗芸能誌
- 柄原嗣雄（1975）：秩父の唄 秩父山村民俗II
- 秩父郡両神村役場（1988）：祭りと芸能 りょうかみ双書2
- 浅見清一郎（1970）：秩父 祭りと民間信仰
- 吉田町（1982）：吉田町史
- 吉田町教育委員会（1981）：吉田町の文化財
- 小鹿野町教育委員会（1984）：小鹿野町文化財
- 皆野町教育委員会（1978）：皆野町の文化財
- 戸田市史編纂室（1980）：市史調査報告書第6集 下戸田の民俗
- 戸田市（1983）：戸田市史 民俗編